

Title	パネルディスカッション：MoSaICによる多面的アーカイブへの挑戦
Sub Title	
Author	嘉村, 哲郎(Kamura, Tetsuro) 池田, 真弓(Ikeda, Mayumi) 石川, 尋代(Ishikawa, Hiroyo) 都倉, 武之(Tokura, Takeyuki) 金子, 晋丈(Kaneko, Kunitake)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC Review Keio University). Vol.2, No.1 (2015. 3) ,p.30- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：DMC研究センターシンポジウム：第4回 デジタル知の文化的普及と深化に向けて： MoSaICによる多面的アーカイブへの挑戦
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000002-0030">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000002-0030</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## MoSaiC による多面的アーカイヴへの挑戦

嘉村 哲郎

東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター／芸術情報センター芸術情報研究員

池田 真弓

DMC 研究センター研究員 理工学部専任講師

石川 尋代

DMC 研究センター特任講師

都倉 武之

福沢研究センター准教授

モデレーター 金子 晋丈

DMC 研究センター研究員 理工学部専任講師

金子：金子です。上の技術展示いかがでしたでしょうか。実際に触っていただけましたでしょうか。DMC の中でもいろいろなやり取りがありながらも、物ができて動いて、そこでいろいろなことを学び、また次に活かしていくというような、その流れというのがご理解いただけたのかなと思います。パネルの方では、とくにこちらとして何かを用意しているわけではありません。まずはメンバー紹介からいきなりたいと思いますけども、先ほどご講演いただいた嘉村さんと石川さんと池田さんと、あと戦略的研究基盤形成支援事業というので一緒にやっております福沢研究センターの都倉先生にお越しいただいております。まず講演をされていない都倉先生の方から、自己紹介を兼ねてお話を。

都倉：慶應義塾福沢研究センターの都倉と申します。私はこちらには福沢研究センターでやっております『『慶應義塾と戦争』アーカイブプロジェクト』というもので集めたコンテンツを、何か活用できないかということを検討する形で、加わらせていただいております。福沢研究センターというところは、名前



都倉 武之

の通り慶應の創立者である福沢諭吉の研究をしているセンターですが、福沢諭吉に関連する歴史資料と共に、慶應義塾の大学史のセンターということで、学校の歴史に関連する歴史資料をいろいろ持っております。ただ、歴史をさかのぼると、大

正 12 年に福沢諭吉の伝記編纂をするということで、資料を集め始めた、それがもともと母体になっているセンターということで、もうデジタルとは程遠い世界で、今でも村役場みたいなところですので、今日のお話もどれだけ理解できるか怪しいところが多いです。私が今収集している資料というのは、慶應義塾自体の元々持っている資料を学内で発掘すること、また慶應の出身者たちが、その時代、使用していたもの、書き留めたもの、そういうものができるだけ集めて、記録しておこうということ、そしてまだ生きていらっしゃる方については、証言を集めて記録を残しておこうということ、この 3 つが主なコンテンツです。この戦争というのは、非常にあぶなかつたテーマです。例えば「戦争」とあえて言っているのですが、この戦争を何と呼ぶかだけでも大変大きな問題になる、そういうものでもありますので、まさに 1 人 1 人が全く違うコンテクストを持って、資料を見るというものでもあります。ですから、とにかく多様なものを集めて、それを提供して、さまざまに解釈をしたり、さまざまに調査したりという場を提供できないだろうかということで、このプロジェクトを考え始めました。そういうコンテンツを MoSaiC というものとの関係で、どう活かせるだろうかということをやってみると、面白いのではないかなというふうに思っておりますが、先月行った展覧会に関して、石川さんのご協力で、少し形にしたものが、上で展示になっておりました。今日はそういうド文系の立場から、何かコメントできるのかできないのか分かりませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

金子：はい、ありがとうございます。ではまずどうしましようかね、先ほどの発表順番にこう聞かれた部分皆様方の方から、きっと全体を通して、いろいろ質疑を投げかけたいというふうな方が、いらっしゃるに違いないと信じているのですけれども、何かご質問等ありますか。

上崎：上崎と申します。金子先生と石川先生のお話の中で、どこまでが共有されている問題で、どこから先が違ってくるのかというのを、すごく注意深くうかがってました。やっぱり見るよりも、石川さんのお話を聞いてこう思ったのは、グループの概念に対して、あるいはグループという概念があるかないかということも、改めてグループという概念を、人文的に協調しているのはなんですが、グループはコンテンツではない、だからそこにノードを設けてしまっていていかどうかってありましたよね。しかし、やはりノードが発生することであるとか、グルーピングが行われることというのは、各時代各小さい時代ですよ、あるいは大きいイメージで何世紀とかって言う。で各時代のエピステーメーを反映すると思うのです。それはもう少し細かく言うと、10年前と今でも恐らく違ったノードが発生すると。です。で、ノードが発生してしまうというふうに、私は考えています。そこで少し気になったのは、先ほど金子さんに、そのノードがない状態、そのフラットに全くコンテンツしかないものをお見せしようじゃないですか、みたいな話を、そこら辺は石川さんの話と、どのようにずれてくのかという話も含めて、ちょっと吹っかけてみました。ちょっとそこら辺のことも含めて、ノードっていうものは、要するにあればグループ化っていうものがなぜお2人の方でずれてきたのかっていう説明をうかがってみたいなどと思った次第ですね。そしてまたそれが、今日、先生がおっしゃっていた、そのシームレスの問題ですよ。我々人文系では、シームレスであることや、有機的であることが縫い目だらけである、あるいは機械的であることよりも、何かいいように聞こえてしまうんですね。しかしシームレスであることや、有機的であることは、これはある種の自然主義であって、それ自体が無条件によいものであるというふうに、要するにシームがあるよりかは、シームレスである方がよい。機械的であるよりかは、有機的な方がいいという考え方自体が、ちょっと取り直さなきゃならないのかなということ最近考えてまして、今日はノードの概念と、シームレスという

ことが標榜されることに関しての、私の認識のずれや、私のこの詭弁も含めて、そうじゃないんだっていうことをうかがえればと思いました。ちょっと複合的な質問で申し訳ないんですけど、こんな感じですよ。コメント及び質問です。

金子：はい、ありがとうございました。石川さんしゃべりたいですか。考える時間が必要ってことですよ。上崎さんはちなみに去年シンポジウムでしゃべっていただきました。継続してきていただいて、ありがとうございます。今おうかがいしながら、いろいろ思ったのは、究極的には、今回カタログというもので、その情報の関係というものを表そうとしているのですが、カタログの空間で、何を我々は表したいのかとか、もしくは何を表さないといけないとか、何を表しちゃう駄目なのかとか。もしくは、そこにおける機能とか、そういったものの整理がまだまだ足りていないのかな。その中で、例えばその1つの例が、先ほどのグループというのに典型的に表れていて、そのカタログの空間の中における情報のユニットとは、一体何ですかと。1個1個のものを伴うオブジェクトに対応させるものなのか、その抽象的な言葉みたいな、抽象的な概念も入ってくるのか、複数のオブジェクトをまとめて、何かのグループなのか、概念なのか分からないですが、そういうものも入ってくるのかとか、何があるカタログ空間における登場人物で、それらがどういうふうに機能することによって、何を達成したいのかみたいなことが、今の問いだというふうに思うのですが、そんなイメージでしょうか。それは今のこちらの方々が答える内容を、僕がちょっと要約しただけなのですが、何かコメントはありますか。

石川：先ほど、グループの話をしておきながら、今の話についていないのですが、そもそもどういうことなのでしょう。

上崎：ノードはコンテンツじゃない。コンテンツじゃないところにノードを作ってしまった、これはまだ審議中だというお話がありましたよね。本当にノードはコンテンツじゃないのですか、要するに抽象的なグループ概念ですよ。これはコンテンツじゃないのか、あるいは皆さんがおっしゃっているコンテンツと言っているものも、またより細かい視点から見たら、抽象的なグループなのではないかというふうなことを、それとももっとシンプルに、いや我々の業界でコンテンツと言ったら、このレベルですっていうことなのか、ここから上は抽象的で、ここか



石川 尋代

ら下は部分的ですというように決まってるのかという話ですよ。ですからグループにノードがないという話が、すごく興味深かったという話です。

石川：これは答えになっているかどうか分からないのですが、グループと

いうのは、コンテンツの集合で、ということは、カタログなのですね。カタログは存在しているのでノードがあってもいいじゃないか、ノードがあるべきだということです。ただ、表示とまたその中のその概念といいますか、概念という言葉はあまり使いたくないのですが、“ある”という言葉に対して、“実体が存在する”というのはやっぱりちょっと違いますね。“表示する”ということは“存在する”ということで、この空間に実体があれば表示できますが、コンテンツではないものを、いかに三次元で表現するかということをやっているんで、そこで、グループのノードが出てくることに対する違和感というのは、もちろんあるのかなと思います。でも、やっぱり概念でなく、何か存在している、存在に重きを置いています。ですから、コンテンツの集合が存在しているからノードの発生は正しい、しかし、表示は微妙ということで、今のところ考えております。

池田：私もこのノードの問題を理解するのに、3～4カ月かかりまして、私もやっぱり文系の研究者なので、使う言葉がすごく重要で、概念というものをやっぱり考えるんですね。概念というのは、どうやって定義づけられるのかというのは、私は専門ではないので、詳しくはないですけど、例えばAという概念は、BとかCじゃないところでAと概念づける、あるいはある関連する事象を、いっぱい集めてきたところで、Aという概念が発生するという考え方があるのは、記号論とかそういう授業でかじったので、私にとってのノードの認識は、ある事象の概念で、例えば、私が撮影というノードを作った、私の考える撮影という概念を、コンテンツを用いて表したいと言ったら、それは違うんだと却下されて、数カ月経ったというところなので、その問題は多分まだ解決していないだろうなと思っております。最近ようやく自分なりに、納得できるというか落としどころを見つけたのは、今このカタログシステムを

作っている私たちが、一生懸命これはこうあるべきだって、定義したがるけれども、実際にじゃあ私たちの手を離れて、一般の人たちが使い始めたときに、このノードはなんだっていうのは、誰も考えないで、ただ線をつなげられる、グループ付けできるというその自由さで、どんどん私たちの想像を超えた使い方をするのではないかと。それがきっと MoSaIC の面白さなのではないかというふうに、頭を切り替えまして、私の好きなようにグループ化をしていこうかなど、今やっているのですが、どうなんでしょうか。

金子：ちょっと視点を変えて、どう自分で思っているイメージを表現するかということに目を向けて行くと、都倉先生は実際に展覧会を行って、いろいろ展示もされていますし、東京藝術大学では、嘉村さんが先ほどいろいろなコンテンツを併せて、ウェブで発信する方法等を作っていくと。結局やはりリッチに情報を伝えていきたいという思いは、多分共通だし、自分の思いを伝えたいというイメージは共通だと思うのですが、一方で制約がいっぱいあると思います。物流空間だったら、三次元的な制約もあるし、高すぎたら読めないとか、実際にウェブでやった場合には、どこまで何を表現できるとか、何と何を出せるとか、そういうふうなその表現と、自分の思っている思いとのギャップというものは、どういうふうに埋められているのでしょうか。そもそもギャップなんて無いというコメントでもいいのですが、いかがですか。

嘉村：表現とギャップ、今先ほどお見せしたアーカイブセンターのウェブサイトに関しましては、一応私の思う感じでやってはいるのですが、やはり「こうなりたい」というものと、実現したものというのは、違うというのは事実でありますね。やはり表現とギャップっていうところでは、そういうところで感じてはいるところではありますね。あとはなんでしょう。どうしたいっていうことでした。じゃあそれを、ギャップを埋めるためには、どうしたらいいのかっていうのは、日々考えていることではあるのですが、そこを解決するためには現実的なお金の問題とか、そういうリアルなことが出てくるわけなんですけど、そういうものも含めて、自分の表現法を高めるためには、自分だけじゃなくて、その関連するああいうものが、コンテンツと言った方がいいでしょうか、まず物に対して扱って、そこに話をみんなできて、それに対する、じゃあこれはどういうふうにして、表現する、あるいは出していくとい

の方がいいでしょうか。いいのかっていうのは、自分だけじゃなくて、その専門家あるいはそれに関わってきた人、そういった人とのコンセンサスの通りじゃないですが、そういったところと調整しながらやっていく。それは今やっているところであるのですが、そういうことをすることによって、自分でも、もともとこうしたいんだと思っていたものが、だんだんちょっと柔らかくなっていくっていうのがありますね。やっぱりその自分がこうだから、こう出していけばいいんじゃないかと思っていたけど、実際に、それに関わってきた人たちとか、その専門的な視点を持っている方、そういう方と話をしてみると、ちょっと違うんだ、こういうふうな表現が必要なんだ、そういうのが出てきますので、1つ視点だけじゃなくて複合的なもの、あとは全然違う分野と、そういったものとの意見を聞いて、それに対してギャップを埋めていくというのが、1つ重要なことだと思っていますね。

都倉：そうですね、アナログに実物を並べる場合と、デジタルに、あるいはインターネット上に展示するといった場合とでは、やはりそれぞれに限界を感じますし、基本的に私の場合はアナログに並べることが専門なので、今まではできるだけ丁寧に説明していましたが、では、それを受け手がしっかりと見てくれるかといったら、決してそうではない。送られてきた感想や、会場でのアンケートに書かれていることを見ると、「そこじゃないよ、それはそうじゃないよ」ということが、いくらでも出てくるわけです。今回の展覧会でも、「この部分は世間でこう間違えられがちだから、こう見せたい」というところを一生懸命、丁寧に書いたつもりでも、見てくれる人が、それを受け取ってはくれないというもどかしさは、あります。逆にデジタルに展開するときには、ある意味では、見えないところにもいくらでも入れられる部分があるということでは、もっと可能性があるのかなというように、このプロジェクトに参加させていただいて感じました。アナログだと、やはりそこにあるもの、そしてまたそれを見る人の頭の中の世界でしか結ばれていかないわけですが、いくらでも与えるものを入れておけると、それを何らかの形でつないでいくことの仕掛けを、工夫してやることで、いくらでも可能性が広がってくるのだな、と。そういうことは、今まであまり考えたことではなかったもので、その点は私なりに今面白いと感じている部分です。

金子：石川さんは発表の中で、それと逆のことを言っていましたね。アナログの展示の可能性というものは、デジタルよりすごい、という話でしたが、いかがですか。

石川：そうですね、ずっとデジタルばかり見ていて…。美術館に行くことはたまにあったのですが、有名絵画などを観に。でもそういったものではなくて、福沢センターの展示は、モノの存在感、空気感というか、それがすごくあるような展示だったんですね。順路があるというわけでもなく、淡々とモノが置かれていて、それに対しての記述も事細かな説明も、多分そんなにありませんでした。本当に淡々としていて、それが新鮮でした。「モノの持つ力というのは、やっぱり違うんだな」と思ってしまいました。いろいろなコンテクスト間を飛び回るわけではなくて、1つ1つのモノを大切に、その1つのカタログを大切にみるというところが、コンテンツをたくさん出して、いろいろなコンテクストをたくさん繋ぐと言っていた私には新鮮だったのです。それで、とても感動したんですね。答えになっているかどうかからには、あのときは本当に「モノには勝てない」と思ったんですよ、デジタルでいくらやっても。

金子：芸術においては、よく「スピーカーでいくら聞いても、音のよさなんて分からないのだ、やっぱり生だ」みたいな話ってあるじゃないですか。一方でその藝大のアーカイブというのは、保存して、それを発信していく文化的なものを底上げしていきたいという目的があって、それは本当に演奏者側の意図というものが、デジタルアーカイブのウェブを通して発信していったときに、果たして受け手側に、正しく伝わっているのか、という点については、どういうふうにお考えですか。

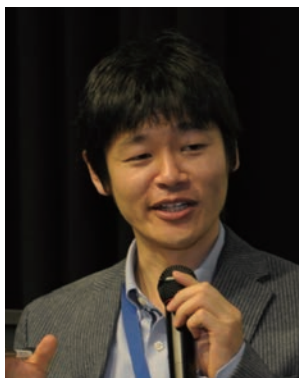
嘉村：そもそも、ですが、デジタルのデータとかそういうものに関して、受け手側に「こうあるべきだから」という押し付けというのは、基本的にはないと思っています。これは私個人の意見ですね。美術の鑑賞などもそうですが、ディスクリプションタイトルは一応ありますと、そのディスクリプションは誰かによって



嘉村 哲郎

意味付けされている、あるいは誰かの視点で解釈が入れられている。それは一つのちゃんとした研究の成果として入っているわけで、それはもちろんいいのですが、それ以外にもやはり1人1人の、いわゆる個人個人の解釈というものを尊重したいというのはありますね。ですから、センターではいろいろな情報データを公開していますが「これをこういうふうに見てくれ」と、そういったものは個人的には考えていないですね。音楽に関しましては、一般の方も見られるようにはしておりますが、それは「こういう分野もありますよ」というきっかけづくりのためのデジタルアーカイブという側面もありますね。「物の力はすごい」というお話をされていましたが、実際その現物を見に来てほしいので、そのきっかけ作りとしてのデジタルアーカイブと、そういった側面が強いかと思っています。例えば藝大の音楽は邦楽もあるわけなのですが、日本の義務教育では、和楽器というものがありませんよね、和楽器を扱う授業がない。では、どういったところから興味を持ってもらって和楽器の演奏者というものを継承していくのかといった場合に、デジタル化して発信することによって、今まで触れてこなかった人に対しての、興味のきっかけとなるものとしての位置付けで考えております。それによって興味を持ってくれなかった人はそれまで、ということなのだと思うのですが、そこからどうやって興味を持ってもらうかという研究も、また別にあると思うのですよね。そういった意味で、我々は今とりあえず出せる物は出して、誰か何かそこに引っかかれば、それはよかったというような認識ではおります。

松田：MoSaICの初期の第一、第二段階でコンテンツを提供した立場として、ちょっと今考えたことがあるのですが、最初のときには実際に概念図を手で書いて、——とにかく人文系の人間というのは、コン



金子 晋文

テキストというのにすごくこだわるわけですよ。モノがどのコンテキストに関連するかで全然違ったものになるから、コンテキストにすごくこだわって、コンテキストを可視化するのが1つ夢というか、オブセッションなのですね。だからあのときは、本当に自分が考えつく限りの、1つのモノ

に関するコンテキストを、全部のつながりを矢印で引いて、これをデジタル空間で再現してくれと。ただ、それをやるのであれば、当然自分もシステムの一部になっちゃいますよね。それだったら、結局それは、自分が一番理想として考えているコンテキストを実現してほしいという、言い換えれば、自分も含めたものを成果物として実現してほしいということではない、自己のデジタル化ではないので、それは必ずしも、デジタルがすすむ方向ではないのかなと思ったのが、私が1回目にやったときの感想でした。その時に、方向性を示す矢印のみで表現するという点が少し気にかかったので、2回目のときは、グループはどうするのだろうと思い、同じ方向性を順につなげていって、ドーナツ型になったらグループを表現したことになるかなと思って、そんな絵を描きました。2回目の時はフォルダを使ってくださいと言われ、これはすごくやりやすかったんですね。フォルダでいろいろなものをグループ化して行けばいい。これとこれが関係あるから1つのフォルダに入れ留という具合に。そのときに思ったのは、ここでこれとこれは絶対つながっているような、自分だけのこだわりはなるべくやめようということです。例えば同じ羊が出てきたら、羊という誰にも分かるつながりでフォルダを作ろうと。12月の絵だったら12月という誰にでも分かる概念でフォルダを作る、そういうつもりでやったのです。自分だけのコンテキストが何かにこだわることをやめて作ったのですが、それがアーカイブじゃないかなと思ったのです。さきほど都倉先生が展示が非常にインパクトがあったと仰いましたが、それは言い換えればアーカイブの控えめさみたいなものが存在していて、逆にその空間でその人独自のコンテキストを作れたことが、インパクトを作り出したのではないかという気がします。それは、逆説的ですが、展示物がアナログだからではなく、そこにアーカイブがあるから実現できるもので、言い換えれば、まさにMoSaICが有向グラフだけで出来上がっていて、グラフしかないその余白の部分に、1人1人がコンテキストを作っていくというかたちに他ならないのではないか、感想ですが思った次第です。

金子：ありがとうございます。実際に作業されている方もDMCのミーティングでもあまりこんなことをおっしゃっていただけないので、なるほどと思いながら聞いていたのですが、そうするとその情報として、コンピュータが保持しているものっていうもの

と、その人間が理解するところ、受け止め方のところの差っていうものを、うまくコントロールしてやることが、非常に伝えるということにおいて、重要というように思われているということですか。

上崎: すごく気になりましたね。恐らく松田先生がおっしゃったのは、あらかじめ松田先生が想定されているご研究の中で想定されている、ご自身が想定されているコンテキスト、それを説明するものとして MoSaIC を使うということが初年度で、でもそうではなくて、もう少し機械的といいますか、いくつか想定されるような任意のノードだったら、12月とかそういうふうな客観的に組めるような文節化をすることによって、松田先生ご自身があらかじめお持ちのコンテキストのイメージを説明するのではなくて、その場でその都度コンテキストが発生するタイプのインタビューをされていたという話をされたのだと、私は理解しました。この違いは恐らくアーカイブとそうではないものの差なんじゃないかということまで、松田先生はおっしゃったと思います。私のパラフレーズがこういうことですよ、だと思ふけれど、そこがおそらく何がアーカイブで、何がアーカイブじゃないのかという問いと、つながっているのではないかと思います。コンテキストが発生するのがコンテキスト、誰かのコンテキスト、誰かのコンテキストを説明するのか、それはノードの話にも、さっきノードの話は答えていただけなかったの、また蒸し返したいなと思います。

石川: 松田先生がおっしゃったことで、今思い出したのですが、あの「戦争の」展示を見ているときに、淡々と物が置いてあった。そこでかわいそうとか悲しいとかってということなくあったのですよ。こんなこと忘れてるのもどうかと思うのですが、私の祖父も戦争で亡くなっているのです。でもあまり物が残ってなくて、それであそこにいたときに、もちろん自分にそういうコンテキストがあって、それがもう淡々と見て、自分の中で思い出したというか、全然会ったこともない祖父ですが、なんとなくそこに、自分のバックグラウンドとのそのつながりを、一瞬感じたんでしょうね。そこで感動したのかなとは、今、松田先生に言われて思い出しました。

金子: 池田さんはどうですか、今回その HUMI のデータ入れてみて、自分のその過去のプロジェクトに参加したときの話とまとめてみて、その改めて数年経った後に、それに接したときのカタログ通しても、MoSaIC を通して接したときの、その感覚っていう

のはどんな感じなんですか。

池田: そうですね、まさに私は、今松田先生が多分ツーステップ踏んで、今の言葉になったかと思いますが、私はまだファーストステップであったなというのを、今お話をうかがっ



池田 真弓

て思いました。つまり自分の中に、やはり私が過去関わった HUMI プロジェクトというもののイメージが、わりと確固としてあって、それを可視化したという思いがすごくあって、自分の中での定義づけっていうと怒られるかもしれませんが、概念定義付けを一生懸命表現して、それが具現化するのとはとても楽しい作業でした。ああ、こういうふうに見える、これとこれはつながっているとか、そういうものがなかなか普通のフォルダ分けだけではできないので、できない部分まで表現できて、すごく楽しかったんですが、じゃあ今度は次のステップとして、これをどうやっているんならに、それぞれの人たちが、新しいコンテキストを発生させられるようなアーカイビング、あるいはカタログングをしていくのかというのを、模索しなければいけないなと思いました。まだその段階まで行っていないということを、今のお話で気づいたということと、あとちょっとその余白というようにお話が、ちょっとあったと思うのですが、先ほど展示のときにお話させていただいた高山さんだっと思うんですけど、アーキビストの場合は、そこにあるものだけではなくて、ないものというのもの、ある種知っておかなければならない、この MoSaIC では、私たちはあるものを一生懸命どう表現するかということに、終始していますが、ないものをどう表現するかというのを、深いご示唆をいただきまして、ああと考えさせられました。確かに私もアナログの研究をしていて、本を見ていると、このページはないですとか、そういうものもありますので、そういうのをないっていうことが分かるようなカタログング、それも押し付けじゃなくて、やっぱり実物の本を見ていると、別にディスクリプションがなくても、ここにページが抜けているというのが分かるので、それって表現できるのかなというのを、ふと考えさせられました。

金子: はい。ありがとうございます。そうするとそ

の先ほどの石川さんの発表の中に、DMC はいつの間にか、デジタルミュージアムだったのにデジタルアーカイブの話になっていたっていうのがあったと思いますが、デジタルになったら、その保存という話から、それを出していく、発信していくという部分が、アナログのアーカイブに比べて、非常に近くなってるので、ミュージアムとアーカイブの違いって、どういうふうに出てくるのだろうみたいなところが、いろいろ議論されていると思います。実際に今の松田先生のお話とか、池田さんのお話とか、石川さんのお話を聞いていて、自分を発信するものじゃないのではないですかと、アーカイブというのは自分の思っているもの発信するものではないのではないですかと。一方でミュージアムというのは、なにかある種のストーリーテリングがあって、そこにその発信したいものっていうのがあるような気が、僕はしているのですけれども、実際にその展示会をやりつつ、一方で保存という役目も担ってる、福沢研究センターとしては、そのあたりの違いを、どういうふうに意識されているのでしょうか。

都倉:私の中では、ミュージアムかアーカイヴかって、その MoSaIC から考えたときには、できあがったものを見て、一般の方がああ面白いなっていう部分と、本当にプロの研究者がこれを使って、新しいものを生み出すぞっていうレベルになるかっていうところをよく考えるのです。一般的な知的好奇心を刺激して興味を持たれるコンテンツを提供するということと、真に学術的研究調査に使えるものとのギャップを埋められるか。論文を書いたり学術的な新しい知見を世に発信していくんだっていう人が、それを見て何か新しい発想が浮かんだり、さらにこれを使って、新しいものを発見する、試みをしようって思うかどうかっていう部分なのかなと思うのですけれども。そういうレベルのアーカイヴっていうものを、MoSaIC を使って作っていくっていうときに、果た



して、ということですよ。そこの部分が、やっぱりすごく高いハードルなのかなと、いつも思っています。

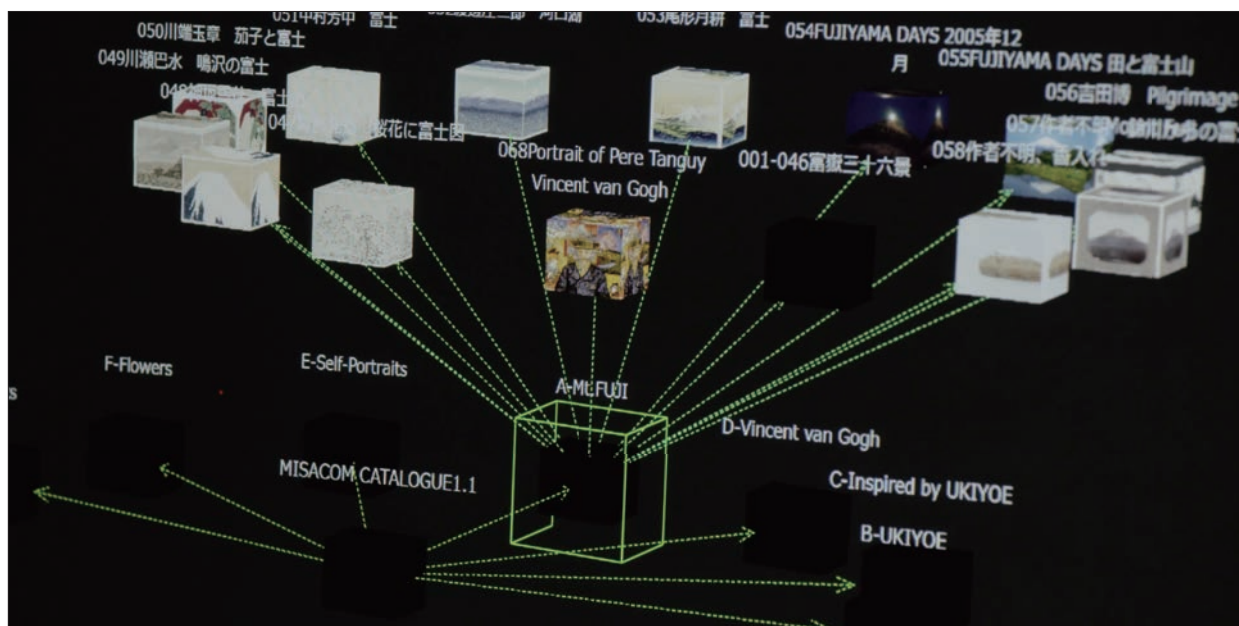
金子:藝大はいかがですか。アーカイブで発信するもの、先ほど伝えたいものがあるんだとおっしゃっていましたが、一方で受け止め方自由ですって、ちょうど中間的な位置付けで、今のアーカイブを作られているような気がするのですが。

嘉村:そうですね、うちの場合は、使うユーザーが明確になっているというのが、他の博物館とか MoSaIC と違うと思います。例えばミュージアムというのは、社会一般を対象にしております。それに対して、本学のアーカイブは、明確にターゲットが決まっているので、そこは非常に恵まれているという点だなというのはありますね。そういった面では、他のところとはちょっと違う形式であるということですね。

金子:そういう場合に、その他のアーカイブと一緒にあって、もしくは他のそういうデジタルのコンテンツと一緒にあって、複合的にまたプラスアルファを出していきたいみたいな欲求って、きっとあると思うのですが。そういう欲求があった場合に、そのユーザーの軸なり、もしくはその保存保管の、もしくは収集の基準というのは、ぶれ始めてくるのでしょうか。

嘉村:今お話の中で、そういった情報を、複合的に他のものと扱いたいのかどうかという話があったと思いますが、これは私個人としては、そういったデータ情報というものは、外に出ていて、いろいろなものと関連する、くつつくことによって、また新たな価値観が生まれると、そういうふうな使い方をしていきたいと思っております。実際にそういったもの、じゃあ生のデータを出せるのかどうかというのは、またちょっと別の話になってくるのですが、そういった意味では、オープンな形で出していくというのは、考えているところでございます。そこが情報統合されるという話になると思うのですが、ある一定のレベルではいわゆる東京藝術大学では、明確に出す情報だというのは、保っておきたいというのはありますね。それに加えて、じゃあそれプラスアルファに関しては、もう自由にしてくださいという、こういう考え方は持っています。ですから、我々の基本的なポリシーは、そこから多分人文系の研究者は、必ず何かしらポリシーを持っていますので、そういった基本的なラインは保っておくと。それ以降





複合的にくっついてきたものに関しては、ここから先は自由ですよと、それはぶれもしようがないと思っています。それを制御しようとなると、かなり大変なことになったりすると思いますので、あえてそこに手を加えて、コントロールするということは、今のところ個人的には考えていません。

大森：大森と申します。これ概念論なんです、アーカイブという概念は、やはり目的として利活用する、先ほどからご説明いただいているところで、MoSaIC でやろうとしていることは、これは検索をするためのたどり着くツールの方法論かと思えます。それで方法論についても、いろいろな情報がそろったから、じゃあ自分が欲するところのコンテンツの、最終の目標にたどりつけるかどうかというのは、固定されているものではないと思うのです。例えば自分の気持ち自体も、あるときからあるときは、やはり気持ち自身もうつろう。そうすると、そういうふうにターゲットが1つということではなくて、複合的にいろいろな条件で動いていくってものではないかなという気がしているのですが、そこについては、例えば MoSaIC を開発するとき、それから使われて、これからこういう利活用をしてもらえないかという場面において、基本的にどういうふうにお考えでしょうか。

金子：僕個人の、なぜこういうことをやり始めたかというこの歴史的経緯を申し上げますと、2007年ぐらいに「デジタルジレンマ」を訳しました。ストレージのコストが大きい、デジタルアーカイブは辛い、どんどんデジタルコンテンツは増えていく。それに対して、どういうふうな枠組みで対処すればい

いか、というのが一番最初に僕の中で出てきた質問疑問点です。ストレージを国会図書館のように、国からお金をもらって、それで動かすというのはいいのですが、では、あるレベルの組織、例えば慶應義塾大学が維持していこうと思ったら、それにどれだけのコストがかかるのか、そのメリットは一体何なのか、それは単にその支出としてだけ発生するものなのか。この支出を少しでも抑えるための収入源を、何か得る必要があるのではないだろうか。デジタルにおいて、それはアナログよりもより気楽に、実現できるのではないだろうか。これが、デジタルでアーカイブをやっていくときに、そのアクセシビリティを高めていくことの重要性を認識した経緯になります。従って要するに、ある1個のコンテンツがあっても、10個の道があるのか、1個の道しかないのかで、そのコンテンツが参照される可能性が変わってきますよと。いっぱい参照されればされるほど、そこに価値があるわけですから、それによって収益が、何かの形で上がりますよと。それを少しでも、その保存のところのコストに回してやることのできないかな、というのが、最初に思い始めたところです。しかしながら、実際にこうカタログをやって MoSaIC を石川さんに頑張ってもらって、作って出てきたものっていうのは、そのアーカイブというものを、気楽に考えすぎていたな、というのが正直なところです。アーカイブがどういうふうにあるべきだとか話すと、上崎さんあたりから「これについてどう考えているか」ってきますし、もちろんその学問的議論としてのアーカイブっていうものもありますけれども、そもそもアーカイブってなんなんだろ

うと、やればやるほど正直分からなくなってきたんですね。本当に到達させることだけが、一番重要なことなのか、何のために保存しているのか、それが徐々に徐々に見えなくなっている。そのコンテンツをやりたいのだったら、自分でストーリーを作って売った方が、よっぽど簡単にお金もうかるのではないかというふうに思うわけです。それなのにたくさんそのコストをかけて、使わないかもしれないものを抱えている。その矛盾点というか、言葉では将来のための投資ですよといつつ、でも一方で消す勇気もないですよ。一番端的に僕がそれを感じたのは、それこそ HUMI のデータを DMC で受け入れますよというのを決めたときです。村上事務長から、DMC で受け入れますけど、技術的なところはよろしくお願ひしますって言われて、技術的なところはよろしくお願ひしますって言われたって、まず一番最初に浮かんだのが、いかに安く保存するかですよ。その DMC の経費の中で、ストレージにかけられるお金、やっぱり考えるじゃないですか。じゃあテープに入れて頑張って、マイグレーションやっても、自由に出なかつたらいけるかなとかって、いっぱい頭の中で、一番最初にまず考えたわけですよ。それでいいですかね、村上さんってちょっと言ったら、あのデジタルなんですから、オンラインにしておくのが当たり前じゃないですかねと、これ多分率直なご意見だったと思うんですよ。じゃあなんで、デジタル化したんですかと、その HUMI で最初にお金をかけてやりました、5年間お蔵入りしました、5年間したらカメラの性能上がりました。じゃあその5年分の価値って、一体なんなんですか。それは今後も出てくると思うんですよ。例えば CG で作ります、CG で作ったら新しいコンテン

ツができあがります。それは IT 作業の能力がいいから、もっといいコンテンツができあがります。じゃあその間持っている価値はなんなんですか。やっぱりそういうふうな、その今のコンテンツの価値っていうものと、それが将来にわたっての価値っていうものを、デジタルにおいては、そのデジタルの技術の進化に合わせて考えなくちゃいけないんじゃないかなっていうふうなことを考え始めて、そうかやっぱりオンライン化っていうふうにはなってます。全然答えにはなっていないんですけども、この悩みは、そのデータをいきなりパンって預けられた瞬間に、もうクリアになってくる。葛藤というか、お金とやるべきこと、やらないといけないこと、そのあたりが徐々に徐々にクリアになっていけば、僕としてはいいのかなと思っています。

